

感想文

英語の意味とは

登別市立鷺別中学校 1年 木下 耕太郎

今回、初の外国旅行となったデンマークへの派遣交流団の他のメンバーとの訪問は、自分の知っている日本の常識が通用しないようなことや出来事がいっぱい、とても驚きました。その中でも一番驚いたことを紹介します。それは、外国人だからといって、皆が皆、英語を完璧に話すという訳ではないということです。

デンマーク人は、小さい子も含めて、母国語であるデンマーク語はもちろん、英語もほぼ理解できるのだろうという考えを自分は持っていました。しかし、ホスト学生のアルバートとその友達の会話の言語はデンマーク語だったのに、アルバートが



自分たち日本人に話す時は英語だったことや、リングフリー校での朝のプレゼンテーションで、自分達が一人一人英語で発表したあとに、教師のアネ先生が、まだ学校に入って間もない生徒達に対してデンマーク語に訳してあげていたことを見て、考え方が変わりました。デンマーク人と日本人の英語に対する考え方は似ているのではないかという考えに、です。日本人同士では日本語を話し、外国人とは、学校で習った外国人と繋ぐ言語の英語でコミュニケーションを図る私たち日本人と同様、デンマーク人も外国人とコミュニケーションを図るために英語という母国語とは別の言語を学校で習い、使う、というところです。英語の文化に早くから触れ、英会話術に長けているのはデンマーク人の方ではあるものの、英語を必要とする理由は、日本人と似ているのではないかと思います。

自分はデンマークでホストファミリーと過ごすことで、他の国の文化に直接



触れただけでなく、自分の英語についての考えまで深めることができました。また、皆でいろいろな施設を見学したり、テーマパークでアトラクションに乗ったりしました。特に、コペンハーゲンのチボリ公園で同じジェットコースターに6回位

繰り返し乗ったことと、人生初の空中ブランコに乗ったことは、とても楽しかったです。このデンマークへの派遣交流は、とても貴重な時間と思い出を僕に与えてくれたと思います。

デンマークで学んだこと

登別市立鷺別中学校 3年 清瀬 栞奈

私は、今回人生で初めて『海外』に行きました。「初めて」ということもあり、行く前は、「英語、通じるかなあ〜。」とか、「ホストの子と仲良くなれるかなあ〜。」とか、たくさんの不安と緊張がありました。しかし、行ってみるとそんなことは無く、とっても楽しめました。



初日、デンマークに到着し、乗り物を降りると、辺りは一目瞭然！建物はカラフルで、人々の格好、会話すらオシャレで、いろいろなところから音楽が聞こえてきて、The ヨーロッパという感じがして、とてもテンションが上がってしまいました。



お店に入り、会計する時も、店員さんの第一声は、発音の良い「Hello！」

私は、英語の発音があまり良くないので、自信無さげに「Hello…」と言いましたが、店員さんが「Where are you come from?」と気軽に話しかけてくれたので、私は「Japan!」と緊張せず、楽しく答えることができました。そ

して、会計が終わると、買った物を渡しながらか、必ずと言っていいほど「Have a nice day!」と笑顔で言うので、私は毎回とても幸せな気持ちになりました。

しかし、良いことばかりではありませんでした。

一つ目は、私が毎日見てしまったことです。何気なく歩道を歩いていると3歩に1つくらいのペースでたばこの吸い殻が落ちていたり、通りすがりの人が落としていたり、禁煙の場所でも平気でたばこを吸っている人などもいました。

そのせいか、外の匂いも少しきつく、たばこの苦手な私は、とても嫌な気持ちになりました。

二つ目は、大通りなどの人通りの多い所でも、平気で殴り合いをしている人がいたことです。それを見て、私はそれまでとても楽しく幸せな気持ちでい



たはずなのに、「葉奈、怖い顔してるよ。」と他のメンバーから言われるほど、嫌な気持ちになりました。

このように、私は、デンマークで良いことも悪いこともたくさん知ることができて、良い経験がたくさんできました。私は、この9日間で、たくさんの人の親切さに触れるなど、人間面でもいろいろ学ぶことができました。

私の人生で最高の9日間になりました。

デンマークの感想

登別市立鷺別中学校 3年 宮本 彩希

私がデンマークに到着して、何よりも先に感じたことは、街の外観がとてもお洒落ということでした。駅の柱や屋根の細かいところにまで模様があり、日本では全くもって見られない風景に感動しました。コペンハーゲン等の都会は人目に触れる機会が多いので目立つ外観にしてあるのだと推測しました。しかし、ホストの家に行って、その考えが間違っていたことに気付きました。統一された家具、



たくさんの間接照明など、それらはカタログの写真のように整った家でした。帰国してからもデンマークのインテリアを参考にしていますが、まだまだ再現できません。そのくらい、デンマークのインテリアは魅力的でした。



そして、日本に比べて、デンマークは人との交流が多いと感じました。学校が終わった後、毎日のように友達の家へ遊びに行ったり、家でも一緒にご飯を作ったりしました。日本ではスマートフォンを触ったり、読書や勉強をしたり、一人で過ごすことが多いので

すが、デンマークでは常に誰かと一緒にいた気がします。日本よりも、人と人の距離が近く、フレンドリーなところもデンマークの魅力だと思います。

他にも、デンマークの人たちは、環境にやさしい生活を送っていることをホストの家で学びました。ホストの話によると、なるべくごみを減らすため、ごみの収集やレジ袋が有料だったり、生ごみは家畜に食べてもらうなど、いろいろな対策を講じているそうです。それを聞いて、買い物をした時のレシートを改めて確認すると、レジ袋代が加算されていました。後から調べたところ、デンマークは

環境先進国として世界でも有名な国の一つでした。現在、どこの国でも環境問題は大変深刻なので、デンマークの習慣が世界にもっと広がってほしいと思いました。

また、勉強面に関しても、私は衝撃を受けました。デンマークの中学校の数学は日本の小学校3～4年生で習うようなものでした。夏休みの宿題も無く、進学競争も無いようです。日本は世界に比べてとても勉強熱心なのだと気が付きました。

私がデンマークで学んだこと、感じたことは、まだまだたくさんあります。デンマークで様々なことを体験すると同時に、日本を客観的に見ることができました。今まで当たり前と思っていたことがそうではなかったり、また、その逆もあったりしまし



た。デンマークに行って、異文化にたくさん触れることによって、自分の常識や価値判断の基準が変わりました。私はこれからも異文化に触れる機会を増やし、思考の幅を広げていきたいと思います。

ホームステイ先での経験

登別市立西陵中学校 1年 船田 清夏

私は、大きな経験となったホームステイ先でのことを紹介したいと思います。まずは、心配だったことを二つ紹介します。

一つ目は、言葉の違いです。やはり「言いたいことが伝わるか？」という心配がありました。ですが、時間と共に現地の人々の英語のしゃべり方に慣れて、事前研修で習った英語とデンマーク語を話すことができました。それにより、ホストファミリーとのコミュニケーションも取ることができました。

二つ目は、生活の違いです。でも実際、日本と全く違って困ったということとは無く、ホストファミリーも、ご飯の時に箸を出してくれるなど、とても優しくしてくれました。

次は、ホームステイした時に感じた日本との違いについて三つ紹介します。

一つ目は、遊びについてです。私のホームステイ先では、主にボードゲームをし、テレビを見たり、電子機器を使ったりすることはしませんでした。私が日本にいる時は、よくテレビを見るなど、電子機器に頼るので、そこが生活の違いなのかと思いました。



二つ目は、家についてです。私がホームステイした家は、レンガのようなもので出来ていて、敷地も広がったので、たくさんの事ができました。例えば、家の中にはアートルームやミュージックルームがあり、アートルームでは一緒に折り紙で紙風船を作ったり、ミュージックルームではピアノなどを一緒に弾けたりと、良い思い出ができました。外にはビニールハウスやツリー

ハウス、卓球台がありました。ビニールハウスではトマトなど色々な作物を育てていて、私もホストファミリーと一緒にじゃがいもを採って食べました。また、卓球台があったことには驚きましたが、後から卓球がイギリス発祥だと知り、ヨーロッパの方でも卓球をよくしていることが分かりました。そして、私のホストの家にはトランポリンがあったのですが、今回の派遣でデンマークへ行ったメンバーと話すと、みんなの滞在した家にもトランポリンがあったと知り、すごいなと思いました。これらは日本の家では珍しい物なので、家を見せてもらった時には、その一つ一つに驚きました。

三つ目は、家の中にある物の違いです。床は、あまりじゅうたんを敷かず、リビングにはテレビが置いてありませんでした。私の家では、各部屋にじゅうたんが敷かれており、リビングにテレビが置かれているので、日本との違いを感じました。



最後に振り返って、今回、「デンマークに行く」という大きな機会があって、さらにホームステイまで出来たというのはすごく貴重なことでした。心配もありましたが、メンバーみんなの助けや現地の人の優しさで心配は消えました。助け合えたメンバーとホストファミリーにはとても感謝しています。私はこの経験を活かして、色んな事を自分なりに頑張っていきたいと思います。

初めての海外、そしてデンマーク

登別市立西陵中学校 2年 滝沢 恵生

僕が、デンマークを訪れてみて思ったことを紹介します。

一つ目は、デンマークの道路についてです。日本では車は左側通行ですが、デンマークでは右側通行でした。そのため、車に乗る時にちょっと戸惑ってしまいました。「助手席に乗っていいよ。」と言われて、ドアを開けたら、そこは運転席でした。

二つ目は、デンマークの街並みです。ニューハウンの様な、カラフルな建物や、レンガ造りの建物など、日本ではあまり見る事ができない色々な建物がありました。また、オーデンセやコペンハーゲンには、街中にゴミ箱が置いてありました。日本でも、街中にゴミ箱を置けば、ポイ捨ても減るのではないかと思いました。



三つ目は、デンマーク人の優しさについてです。チボリ公園で、ジェットコースターの係の人が「コンニチハ」と日本語で挨拶をしてくれたり、レゴランドでポテトを食べて、そのゴミを捨てようとした時、ゴミ箱の周りにたくさんいた虫に脅えていたら、親切なデンマーク人が代わりにゴミを捨ててくれたりと、日本人とはちょっと違う優しさがあり、とても楽しく過ごすことができました。自分もそういう優しい人間になりたいと思いました。



四つ目は、デンマークのリングという小さな町で、ホームステイができて良かったと思っていることです。ホストファミリーには、農業用のトレーラーに乗せてもらったり、ハンドボールに連れて行ってもらったりと、おかげでとても楽しく過ごせました。また、

学校の授業に参加したり、幼稚園を見学したりと、今回の派遣事業に参加したから体験できることもたくさんあって、本当に良かったです。そして、ホストステューデントやその家族を始め、学校の他の生徒達とも英語を話しながら、ジェスチャーも使ってコミュニケーションを取ることができて面白かったです。もし、次に外国人に会っても、英語でわかりやすくコミュニケーションを取れるように、これからたくさん英語を勉強したいです。

そして、ホストファミリーとは、今後もメール等でやり取りをし、いつかまた自分がデンマークに行った時には再会し、また一緒に、たくさんの思い出を作りたいと思っています。



デンマークに行って楽しかったこと、いろいろ

登別市立緑陽中学校 1年 樋口 暖日

僕は、デンマークに行って、一番楽しかったことは、ホストの人と一緒にフットサルをしたことです。そもそも、ホストの家にフットサルコートがあって、トランポリンもあるところがすごいと思いました。フットサルは、とても楽しかったけど、ホストの人がとても上手ですごかったです。トランポリンは、ホストの人がトランポリンの上でバック宙していたのがすごいと思いました。



また、街の建物がとてもカラフルで、歴史がある建物もたくさんあり、とてもびっくりしました。スポーツ施設では、トレーニングをしているところを見たりしました。大きな体育館みたいな所では、バドミントンの選手が練習していました。その中に、オリンピックにも出ている、世界ランキング上位の人がいたというのを、帰って来てから聞かされて、びっくりしました。

イーエスコー城では、たくさんの動物の首やよろいなどがありました。行く前から聞かされていた、動かすとクリスマスにイーエスコー城が沈むという人形を見ました。少し暗い所にあって、顔が見えませんでした。イーエスコー城は、マリンパークには無い、とても大きな池があって、白鳥などがいました。



レゴランドでは、ジェットコースターがたくさんあり、3本くらい乗りました。レゴランドの中に帽子みたいな珍しい形をした“わたあめ屋”がありました。この店のわたあめは、いちご味と普通の味がミックスされていて、とても美味しかったです。途中雨が降ってきたりしたけれど、楽しかったです。

学校の、デンマークと日本の違いは、数学の筆算のしかたです。最初は、どういうやり方なのかわからなかったけど、慣れると日本よりやりやすいと思いました。

チボリ公園は、その入口にぬいぐるみの店がありました。店に入ると大きな機械があり、ケースの中で何かぐるぐる回っていました。店員さんに聞いてみると、「ぬいぐるみの中に入れる綿だよ。」と教えてくれました。店の中を見ると、綿が入っているぬいぐるみと、入っていないぬいぐるみの両方がありました。自分で綿を詰めることができるお店は、日本では見たことが無いので、びっくりしました。また、ジェットコースターには7回乗りました。とても楽しかったです。



僕は、デンマークに行って本当に良かったです。特に、ホストファミリーの人と遊んだのが一番楽しかったです。僕は、生きている間にもう一度デンマークに行って、ホストの人たちと、ぜひまた会いたいです。

デンマークで過ごした最高の夏休み

北海道登別明日中等教育学校 1 回生 佐藤 杏花音

まず、私がデンマークに行って驚いたことを二つ紹介します。

一つ目は、デンマークの家のほとんどの庭にトランポリンが埋められていたことです。普通の家庭にトランポリンがあることに驚いていた私に、ホストのアンドレアがもっとすごいものを見せてくれました。それは、トランポリンの上で彼女が華麗にバク転をしたことです。とても上手でカッコ良かったです。



二つ目は、トイレの流すボタンです。日本では電動やレバーを奥や手前に引くのが主流ですが、デンマークでは水のタンクの上や壁にボタンが埋め込まれていて、とても驚きました。

次に、私のデンマークでの楽しかったことを紹介します。

デンマーク最後の夜に行った「チボリ公園」という遊園地が一番楽しかったです。中でも、特に印象深いのは、同じジェットコースターに7回も乗ったことです。楽しかったのですが、一つだけ怖かったことがあります。それは、そのジェットコースターの一番後ろの席に乗った時、安全バーがゆるゆるだったことで



です。急降下する度に体が浮かび、とても危険で恐ろしかったです。他には、360°位回転するジェットコースターに乗りました。とても怖かったけれど、楽しかったです。人生初の空中ブランコは、とても高くて怖かったのですが、チボリ公園全体を見渡すことができ、最高でした。いつかまた、デンマークに行ったら、絶対にチボリ公園に行きたいです。

最後に、面白い話しを一つ紹介します。写真はイーエスコー城のトイレのサインです。日本では、どこも同じような真面目なデザインの物が多いですが、イーエスコー城のトイレのサインは、このように、トイレを我慢している男女が描かれていました。このユーモアあふれる看板に、私たちは度胆を抜かれ、全員で指を差して笑いました。これはデンマークでの一番の思い出になりました。



デンマークで知った食文化

北海道登別明日中等教育学校 1年 寺沢 美柚

今まで、中国に住んだり、東アジアの国々を見てきたり、オーストラリアを旅行したりする中で、世界の食文化に興味を持つようになりました。私は、まだ行ったことの無いヨーロッパに行くことで、見てきた国々の食文化の違いを見つけ、食から見える幸せについて考えたいと思い、デンマーク派遣研修を希望しました。

一緒に過ごしたホストファミリーは、どの人も明るく優しく、すてきな人たちでした。夕飯には、肉とジャガイモを使ったデンマーク料理をいただき、脂身の少ない肉料理から、健康を大切にする食文化に触れることができました。朝食は、ホストファミリーの庭で採れたミニ



トマトやリンゴと、シリアルをヨーグルトに入れ、牛乳とともにいただきました。これも健康を意識した食事で、日本の朝食よりもシンプルな献立でしたが、ホストファミリーのお父さんは「シリアルを入れることでスタミナがつくよ!」と言っており、日本との食の考え方の違いを知りました。驚いたのは、昼食のために



持たせてもらったランチバッグの中身でした、その中身は、生ニンジン、きゅうり、桃とデンマーク料理のラップサンドで、透明のビニール袋に入っていたことでした。弁当箱の中におかずがきれいに並んで入っている日本のお弁当と、袋の

中に食べる物が無造作に入れられているデンマークのお弁当を比べてみて、作ったおかずを大切にし、食べてもらう人の目も楽しませる日本の食文化の素晴らしさを改めて感じることができました。

デンマークは幸福度で世界一になったことがある国です。私は食文化で「幸せ」を感じたならば、それは健康を意識した食事と食材の良さを生かした料理であったと思います。東アジアの国々も「医食同源」を意識し、食事から健康になろうと努めています。デンマークでも同じようなことを感じる事ができました。



これからは、茶道などを通じて日本の食文化やおもてなしの仕方を知り、外国の人に日本の良さを広めていきたいと思います。デンマーク研修に行かせていただいた登別の皆さんに感謝します。

親切な心に触れて

北海道登別明日中等教育学校 3 回生 柳瀬 望琉

私がデンマークに行って感じたのは、デンマークの人々がとても親切だということです。そう感じた理由は二つあります。

まず、コペンハーゲンでの移動の時です。私たちがどの電車に乗れば良いのかわからなくなったり、道に迷ったりした時、吉井先生が近くにいた現地の方にあずねてくださったのですが、そんな時には、どの人も真摯に聞いて、教えてくれました。そして、私たちでも聞き取れそうなくらいのスピードで丁寧に話してくれました。中には、乗るべき車両まで案内してくれる人もいました。私は、海外の人は親切だけど、あまり丁寧ではないイメージを持っていたのですが、思っていたよりもずっと日本人のレベルに合わせて対応してくれたことが、印象的でした。

次に、ホストファミリーについてです。私と清夏さんがホームステイをしたクヌーセン家では、おみやげに持って行った折り紙や筆ペンと一緒に遊んだり、デンマークのボードゲームを教えてくれたり、温室や畑といった家庭菜園で収穫を体験したりと、家だけでも多くの経験をさせていただきました。また、レゴランドでは、他のホスト達とも一緒だったのですが、雨が降ってきた時は屋根のある場所で順番を待つアトラクションに案内してくれたり、ジェットコースターでの写真を買ってくれたりしました。ホストのみんなが、私たちが楽しめるようにいろいろ考えてくれたことが、これ以上無いほど嬉しかったし、おかげでリングゲでの 4 日間は大切な思い出になりました。





実際にデンマークに行かないと分からないデンマークの人々の親切心に触れることができたのは、今回の派遣の収穫の中でも、大きなものだと思います。他にも理由はありますが、

これは私がもう一度デンマークへ行きたいと思う理由の一つとなっています。そして、日本で外国人と交流する時には、彼らのように、親切な対応を心がけたいです。

引率者報告書

令和元年度 登別市デンマーク友好都市中学生派遣交流事業を終えて

団長：登別市総務部総務グループ 土門 和宏

〈派遣日程の経過報告〉

1日目 8月9日（金） コペンハーゲンへ

朝5時過ぎ、市役所駐車場に新千歳空港で合流する団員1名を除いて、皆が集合しバスに乗り込んだ。保護者や校長先生、登別デンマーク協会、企画調整グループ職員の皆さんなどに見送られ、8泊9日の「長い」旅が始まった。自分が初めてのヨーロッパ、初めてのホームステイに少し不安を感じているのとは対照的に、団員達のテンションは高く、どこまでも明るい。

新千歳空港で最後の団員1名と合流し更にテンションを上げ、ANAのチェックインカウンターへ向かった。成田空港までの飛行機の座席は皆固まっていたが、成田空港からコペンハーゲン空港までの飛行機の座席は、残念なことに全員がバラバラの席になっていた。長い11時間30分になりそうだ。

成田空港ではあまり時間が無く、出国手続きやデンマーククローネへの換金をバタバタと行い、コペンハーゲン空港行きのスカンジナビア航空に乗り込んだ。飛行機は満席で通路側でもなかったことから、皆の様子を気軽に見に行くこともできなかった。11時間30分のフライト中、2回の食事を取り、3本の映画と1本のドキュメンタリーを見るも時間を持て余す。新千歳空港からコペンハーゲン空港までの間、長時間のフライトで体調を崩す団員もおり若干不安もあったが、コペンハーゲン空港に到着した途端、これから始まる海外生活への期待から全団員の元気は回復した。

入国審査は、事前研修で英語での受け答えを練習していたが、実際は係員にパスポートを渡すと、「コンニチワ～」と言われながらスタンプを押され、あっけなく終わった。

鉄道の乗り方に戸惑いながら、空港からコペンハーゲン中央駅へ移動した。コペンハーゲン中央駅の歴史を感じる重厚な雰囲気、自分が北欧へ来たことを実感した。宿泊するホテルは駅から直ぐ近くの場所にあり、ここも歴史と高級感を醸し出している。



チェックインの後、駅周辺を散策しながら夕食の場所を探す。デンマークでの初めての食事は日本では珍しいメキシコ料理のビュッフェとした。外からチボリ公園などを見つつホテルに戻り深い眠りについた。日本との7時間の時差もあり、とても長い1日だったが、団員達は朝方まで盛り上がっていたようだ。

2日目 8月10日(土) オーデンセ観光、リングヘ

ホテルでの朝食はbuffeスタイルだったが、パン、チーズ、サラダ、フルーツ・・・すべてがおいしく驚く。贅沢な朝のひとときを過ごした後、9時過ぎにホテルをチェックアウトしコペンハーゲン中央駅へ向かった。鉄道でオーデンセ駅に移動するが、風景を楽しんだり、席が隣になった外国人と交流したりと移動の1時間20分はあっという間に過ぎた。



オーデンセ駅に着くと、短い停車時間の間にキャリーケースを列車から下ろすことに必死だった。苦勞していると現地の方がすごく手伝ってくれる。全部のキャリーケースを列車から下ろし、手伝ってくれた方にお礼を言おうとすると、その人は私たちの滞在中、色々とお手伝いしていただくリングヘフリー校のアネ・ヘルストラップさんと7学年の生徒、ホストファミリーの皆さんだった。

ホストファミリーの皆さんに荷物を預け、アネさん、生徒の皆さんとオーデンセ市内の見学に出かけた。昼食にサーモンのサンドイッチを食べるがとてもおいしい。デンマークでの食事は、この後ホストファミリー宅での食事でも外食でも何もかも美味しく最後まで幸せだった。ただし、ラクリスというグミのようなお菓子だけは・・・。

オーデンセは、デンマークを代表する童話作家であるアンデルセンが生まれた町だ。

博物館までの道路には、アンデルセンがいかに背が高く足が大きかったかが分かるよう、実寸大の靴あとが描かれているなどの工夫もあり、きれいな町並みや公園を楽しく散策することができた。アネさんの説明を吉井先生が訳してくれたおかげで、とても興味深い話を沢山聞くことができた。博物館には何やら不気味な切り絵が沢山飾られており、独特の雰囲気が漂っていたが、帰国後、切り絵はアンデルセンが創作した作品のレ



プリカだったと分かった。そのほか、貧しい生活を送った小さな生家や執筆部屋などを見学し、いよいよホームステイ先となるリングヘの町に向かう。移動の途中、一緒に見学してくれていたリングヘフリー校の生徒からラクリスをお裾分けしてもらおう・・・。団員から正直に「日本人には苦手な味」と伝えたと、とても驚かれた。

リングヘはオーデンセから列車で15分ほどののどかな町で、私たちが到着した時は小雨が降っていた。ファボー・ミッドフン登別友好協会のリズィ・サンダー会長をはじめ、ホストファミリーの皆さんが駅で待っていてくれて暖かな歓迎を受けた。

と思っていると、状況もよく分からないまま、あっという間に、皆、それぞれのホス

トファミリーに連れられて行ってしまった。

私、吉井先生、市民サポーターの福岡さんの大人3人も、ホストファミリーのソレンとエリンに連れられ、これからお世話になる家に向かった。リングエの街並みは、いかにも北欧の住宅街といった落ち着いた風情で、デンマークの人たちは花が大好きということもあり、玄関先や庭が花や木で彩られている。私たちを送るプジョーのマニュアル車は住宅街から少し離れた郊外の大きな家の前で停まった。

ホストファミリーは、ご主人のソレン、奥さんのエリン、長女のカトリーヌ、長男のアレクサンダー、次女のエマ、三女のヨセフィーヌの6人家族で、私たちが滞在中は、カトリーヌとアレクサンダーが居間で寝起きし、エマが今回ホストファミリーとなっている友達宅に泊まり、それぞれの部屋を空けて貸してくれた。

その日は、ハンバーグに似たデンマークの家庭料理、フリカデラをワインといただきながら、デンマークのことなどを楽しく談笑した。吉井先生と福岡さんは英語が堪能であり、英語が話せないのは自分だけだ。海外でコミュニケーションを取るには英語というツールが重要であることを改めて痛感した。

3日目 8月11日(日) ショッピングセンターと海辺の公園

今日は日曜日。予定表では、「終日ホストファミリーと過ごす」となっていたが、皆でショッピングモールに行くことになった。チーズを薄く削ぎパンにのせていただく。ホストファミリー宅では、コーヒーは1杯毎に豆をひき淹れるコンビニのコーヒーメーカーのような機器を使っていた。パンもコーヒーもとても美味しい。

朝食の後、ホストファミリーと車でショッピングモールへ向かう。ショッピングモールは広大な敷地に平屋で建っており、日本のショッピングモールよりかなり大きい。

一晩、ホストファミリー宅で過ごした団員が次々とホストファミリーに連れられて集まってきた。体調の悪そうな団員はおらず、それぞれ昨日のホストファミリー宅での出来事を報告しあう。

それぞれホストファミリーとショッピングモールの雑貨屋や土産物屋などを見て回った。雑貨屋は有名なフライングタイガーなどお洒落な北欧デザインの雑貨が並ぶ。土産物屋にはどこも沢山の国旗をモチーフとしたお土産がある。デンマークの人達は国旗が大好きなようで、街のあちこちに国旗や国旗をあしらったデザインがあふれている。

この日はショッピングモール内のフードコートで、タイ料理の焼き鳥やチャーハン、焼きそばに似た料理をいただいたが、日本ではあまりなじみの無い「量り売り」だった。



昼食を終えどこかに移動するらしかったが、いまいち状況が分からないまま、ホストファミリーの車に乗り込み、着いた場所は、海水浴場と広場のある公園だった。既に到



着していた団員もおり公園の遊具などで遊んでいた。団員、ホストファミリーも揃い、日本の生徒、デンマークの生徒が入り交じって、広い芝生でサッカーをして楽しんだ。

突然、広場の一角で大道芸が始まり皆で鑑賞したり、クラゲが沢山いる海水浴場を散策したりしながら夕方まで過ごし、それぞれのホームステイ先に帰った。

4日目 8月12日(月) 施設視察、リングフリー校の始業式

今日からリングフリー校の新しい学期が始まる始業式の日だ。始業式の日には午後3時頃に生徒と保護者が集まり、ピクニックのようなことをするらしいが、イメージが湧かない。

スケジュールでは、朝、青年団でお手伝いをする事になっている。皆、ホストファミリーに連れられて、リングフリー校に集合しアネさんに迎えられた。とは言っても初めは、連れてこられた建物がリングフリー校だとは気がつかなかった。広い敷地に平屋の建物がいくつか並び、中庭も広く開放的で学校と思わなかったからだ。

談話室のようなスペースの一角に折り紙が置かれており、ホストファミリーのリングフリー校生も加わり、皆で鶴を折った。鶴をとて小さく5mmくらいに折ることができる団員もあり、日本人の自分も驚いたが、がに股の足がついた気色悪い(?)鶴を折る団員もあり、それにも驚いた。折った鶴は後でホールに飾られていたが、がに股の鶴もしっかり飾られていた。

外で遊んでいる団員もあり、皆で手を繋いだりして何やら遊んでいる。どうやらデンマークの遊びを教えてもらっているようだ。

ファボー・ミッドフュン登別友好協会のリズィさんも来て、古いアルバムを見せてくれた。これまでのホームステイ交流や自分が登別市に行ったときの写真がまとめられており、リングと登別市が積み上げてきた交流の歴史を改めて感じた。

アネさんに連れられて、団員とリングフリー校の生徒とファボー・ミッドフュン市役所に向かう。石畳とレンガ造りの街並みやきれいに手入れされた公園(実は墓地)を楽しみながら歩き、市役所に到着した。

自分で車を運転してきたリズィさんと合流し、ホールへ案内された。ファボー・ミッドフュン市長から歓迎の言葉をいただき、登別市長からの親書とお土産を渡した。ファ

ボー・ミッドフン市長からも親書と団員へお土産のバスタオルをいただいた。

市役所を後にし、次は老人ホームへと向かった。平屋の老人ホームは日本の施設よりも一部屋、一部屋がとても大きく、台所なども配置されていることから普通の家にお邪魔したような感覚だ。それぞれのユニット毎にリビングのようなくつろぐスペースがあり、入居者の皆さんが談笑していた。皆さん、とても明るく、ここにも幸福度世界1位の一端を見ることができた。

次は幼稚園へ向かった。ここも平屋の建物で、中庭にでると日本とはちょっと違う印象の広場が広がっていた。小山や砂場、隠れ場所のような小屋などが並ぶ。

ここで昼食を食べることとなった。リング滞在中は、それぞれのホストファミリーが用意してくれた昼食をいただくこととなっている。私たち大人にも用意してくれており、色々な具材を挟んだサンドに、プラム、パックに入ったジュースなどを厚手の透明ビニールに入れて渡されていた。周りを見渡すと透明ビニール以外にも様々な容器があり、プラスチックの弁当箱（商品名 BENTO で売っていた。）だったり、タッパウエアに団員の名前を書いてもらったりしていた。昼食に生のニンジン定番らしく、複数の団員に入っている。生のニンジンが苦手な他の人に食べてもらっている団員もいたが、皆、美味しく昼食をいただいた。



リングフリー校に戻り、団員達は7学年の教室で生徒と一緒にホームルームのような授業を受けた後、皆で中庭で遊んでいたが、生徒も保護者も体育館に移動を始めた。

中では、皆が手を繋ぎフォークダンスのような踊りを楽しんでいる。既に沢山の団員も混じっており、見よう見まねで踊っている。ふと見ると吉井先生が嫌がるソレンさんを誘い踊りに混じっていた。



何種類かの踊りで大いに盛り上がったところで、中庭に移動し外での食事が始まった。それぞれの家庭で用意してきた食事のほか、持ち寄ったケーキなどもいただいた。天気の良いなかで、芝生にレジャーシートを広げていただく食事はとても美味しかった。全校生徒と保護者が中庭でピクニックする光景は壮観だった。

5日目 8月13日(火) 学校での授業、イーエスコー城見学

朝、リングフリー校の全校生徒が集まる「朝の集会」に参加する。その日歌う曲の歌詞がスクリーンに映し出されているが、分厚い歌詞が書かれた本を見ている生徒もいる。ピアノの生演奏で皆で歌うが、とても厳かな心地よい雰囲気が流れる。私たちが歓迎してだと思うが「さくら」も歌われる。

いよいよ私たちのプレゼンテーションの時間となる。おそらく一番緊張しているのは私だ。事前研修で「オリンピック・ゲーム」の発音に超ダメ出しをされている。団員達のプレゼンテーションがどんどん進み、終わった団員から安堵の表情に変わっていく。事前練習の成果から、皆、とても上手だ。最後に私の番となったが、団員達が「オリンピック・ゲーム」に期待しているのがひしひしと伝わる。結果はとても上手に発音できて大成功だった。誰がなんと言おうとも。



プレゼンテーションの後に、「パプリカ」を踊り、その後「上を向いて歩こう」を団員のピアノ演奏で歌ったが、デンマークの人達は歌と踊りが大好きなのが伝わってくる。「上を向いて歩こう」は大変好評で、リクエストを受けて翌日の「朝の集会」、「お別れパーティ」でもピアノ演奏と歌を披露することとなった。1回は「SUKIYAKI」バージョンでデンマークの皆さんと一緒に合唱した。ピアノ演奏

の団員は初め不安そうだったが、素晴らしい演奏を披露した。

「朝の集会」が終わり、なんとドイツ語の授業を7学年生と一緒に受ける。本に書かれた絵を見ながら簡単な単語を学んだ。

団員達が次の数学の授業を受けている間、大人3人は体育館を見学させてもらった。地元の方などがスポーツを学びに来ており、エアロビクスのような運動を行っていた。体育館は2つあり、奥の体育館には体操競技を行う設備のほかトランポリンなども設置されていた。こちらではトランポリンはメジャーな競技、娯楽のようで家庭や公園などあちこちで見かけた。

吉井先生とトランポリンを楽しんだ後、団員と7学年生、先生と近隣の公立校ノーアエア校を訪問した。ノーアエア校ではグループワークに参加させてもらい「デンマークと日本の学校の違い」などをテーマに、少人数のグループに分かれ話し合いをした。デンマークの生徒も英語の能力はさほど高くなく、意思疎通に苦労しているようだったが、翻訳ソフトを駆使してなんとか話を進めているグループも見受けられた。



ノーアエア校の後、各ホストファミリーの車でマリパークニクス城のモデルとなったイーエスコー城の見学へ出かけた。あいにく小雨が降る中での見学となったが、とても広い敷地にハーブガーデンや生け垣の迷路、アスレチック、車の博物館などが並ぶ。

奥にあるイーエスコー城は池の上に建っており、マリパークニクス城によく似ているものの歴史を重ねた重厚感やはり本物にしか無い。中に入ると高い天井の部屋に甲冑や骨董品などが並ぶ。屋根裏部屋にある「動かすとクリスマスに城が沈む」と言い伝えられている人形などを見学したあと、大人は散策を生徒はアスレチックなどを楽しんだ。



イーエスコー城見学の後、団員達はホストファミリー宅に帰宅したが、私と吉井先生、福岡さんは、リズィさんのお宅に寄らせていただいた。

リズィさんのお宅は、高齢者の皆さんが集まって暮らす「シニアハウス」にあった。「シニアハウス」と言っても住んでいる高齢者の皆さんは自立した生活を送っており、長屋のような造りになっている。玄関の石畳には「春・夏・秋・冬」と刻まれた石が埋めこれている。お宅はバリアフリーになっており、コンパクトながらもリビングには大きな窓、外にはテラスがあり開放的で明るい印象だ。

デンマークでの生活などについて、いろいろお話を伺うことができ、とても楽しい時間を過ごすことができた。

6日目 8月14日(水) レゴランド、お別れの会

この日はリンゲフリー校の「朝の集会」に参加した後、団員と7学年の生徒、アネさんは貸し切りバスでレゴランドへ向かった。バスで片道1時間30分かかる。バスの中では夏休みの宿題をする団員も見受けられる。聞くと勉強道具を持っては来たが、この日までやる暇が無かったとのことだ。



レゴランドは入場券を買うにも行列ができており、とても人気があるようだ。団員と7学年の生徒は入って直ぐに、ジェットコースターなどの乗り物があるエリアに消えていった。あいにく雨が時折降る天気で、満足いくほど乗り物には乗れなかったようで、団員達はこの不満を翌日のチボリ公園の遊園地にぶつけることとなった。

レゴランドは乗り物だけではなく、レゴで作られた精巧なミニチュアのコペンハーゲンの街並みや飛行場、等身大の人形など見るだけでも楽しめるテーマパークになっていて、海外からの観光客も多く訪れていた。

お土産などを買い込んでいるとあっという間に帰る時間となり、またバスでリングフリー校へと戻った。

リングフリー校でのお別れの会では、7学年の生徒と家族、友好協会の会員の皆さんが自宅から料理を持ち寄った食事会から始まった。色々なデンマーク料理が並んだが、どれもとても美味しかった。

食事が終わったくらいの時間で、団員はホールへ集合した。お別れのアトラクション、「U. S. A.」のダンスと「リメンバーミー」の唄を披露する準備と最後の練習を行う。

食事を終えた皆さんもホールに集まり、お別れのアトラクションが始まった。

「U. S. A.」も「リメンバーミー」も大盛況のうちに終え、最後は「鬼踊り」を皆で踊った。

アトラクションの披露が終わり、リズィさんから登別デンマーク協会の文化交流事業で登別市に招待されている研修生ルイス・ランゲブル・ビーターセンさんを紹介していただいた。

ホールに突然、季節外れのサンタクロースが現れ、団員と7学年の生徒にプレゼントを配ってくれた。

お別れの時が近づき、団員も7学年の生徒も自然と感情があふれ、目から涙がこぼれ出し、別れを惜しんだ。



7日目 8月15日(木) リングから出発、コペンハーゲン観光

仕事や学校へ向かうホストファミリーとお別れの挨拶をし、リング駅に送ってもらった。団員もホストファミリーと一緒に次々と集まってくる。

それぞれ別れを惜しみ、みんなで写真を撮ったりハグしたりしている。



団員と見送りのホストファミリーがホームに移動してからは、涙に拍車がかかる。列車に乗り込む頃には、号泣する団員も多く列車の中は悲しみに包まれた。列車が動き出すと、まるで映画のように手を振りながら追ってくる少年がいる。感動的な場面であったが、女子の団員としては別のお気に入りの少

年にやって欲しかったと涙ながらに訴えていた。

オーデンセ駅に着く頃には落ち着きを取り戻し、事前研修で教えてもらっていた「有料トイレ」を試してみたりして、コペンハーゲンまでの列車を待った。

コペンハーゲンまでの列車の席は来たときの席よりも豪華な指定席で、ゆったりと過ごすことができた。約1時間30分でコペンハーゲン駅に到着した。

ホテルは来たときと同じホテルなのでスムーズに移動する。キャリーケースをホテルに預け、今日の行程をサポートしてくれるヤエスとランチに出かけた。

ヤエスは、日本に滞在していたこともある青年でとても誠実な人柄なのを感じた。自分が日本で滞在中に受けた恩を返したいという思いがあり、私たちにもとても親身に接してくれていた。

ホテルの前に着いた貸し切りバスに乗り、様々な競技のデンマーク代表や代表候補が練習するスポーツ施設ブレンビュハレンに向かった。コペンハーゲンの少し郊外にあるこの施設には、サッカー専用スタジアムや練習グラウンド、選手やコーチが宿泊できる施設、トレーニングルーム、大きな体育館などが集められている。



施設の担当者に施設を案内していただいたが、バドミントンナショナルチームの練習などを見ることができた。後で調べると世界4位のアンダー・アントンセン選手もその練習に参加していたようだ。

ホテルに戻りチェックインを済ませたあと、ヤエスの案内でコペンハーゲン市内の観光に出かけた。

目的地はニューハウンド、そこまで経路にある王立劇場や宮殿など見ながら散策した。コペンハーゲンの街並みを満喫することができたが、団員達の心は既にチボリ公園の遊園地に行っている。まだ着かないのかという団員からの圧力を背中に感じながら、ニューハウンドに到着した。



ニューハウンドは運河沿いに色とりどりの3階、4階建ての建物が並ぶ美しい観光地だ。皆、運河や建物をバックに写真を撮る。観光客が沢山おり、遊覧船も運河を航行している。

コペンハーゲン駅の近くで中華料理を食べたあと、いよいよお待ちかねのチボリ公園へ向かう。チボリ公園の前で、ヤエスに団員全員で「Tak!」とお礼してお別れした。

既に日が落ちて薄暗くなり始めているが、多くの人達がチボリ公園の入場に列をつくっている。公園の中は、沢山の人が散策したり食事を楽しんでいる。至る所が電飾

で彩られており、幻想的な雰囲気のある通路を歩いて行くと、遊園地のゾーンが見えてきた。閉園まで2時間30分くらいだったが、迷わず乗り放題のチケットを購入した。

遊園地の乗り物から、団員達の日本語の大きな悲鳴や歓声が辺り一帯に響く。一つ終わると次の乗り物に走って移動するが、並ぶことがほとんどないので凄い勢いで乗り物を制覇していく。

最後は同じジェットコースターを繰り返し乗る。このジェットコースターは乗っている時のフォトを買うことができるが、サンプルをモニターで確認すると、皆、大興奮していることがわかる。この興奮が、悲しいハプニングへと繋がった。

団員の1人が、ポケットに入れていたスマホを紛失した。状況から繰り返し乗っていたジェットコースターが怪しかった。係員に状況を伝え探してみたが、コースのどこかに飛んでいってしまったのか見つからない。

スマホを無くした団員は、吉井先生に助けを求めチボリ公園のサービスセンターに相談し、閉園の時間も迫っていたことから他の団員はホテルに戻ることにした。

ホテルに戻る途中、チボリ公園が閉園の時間となり花火が打ち上がり始めた。団員と街角から見えていたが、街のど真ん中で花火が連発で上がる光景はとてもきれいだった。後から聞くと、チボリ公園に残った団員と吉井先生は花火が上がっている真下でスマホを探していたそうだ。(結局、スマホは見つからなかった。)



ホテルに戻ると23時を過ぎており、内容の濃い1日だったことから、私と吉井先生は直ぐに深い眠りについたが、団員達はもうやら朝方までコペンハーゲンの夜を堪能したようだ。

8日目 8月16日(金) 日本へ

ホテルの美味しい朝食を食べた後、帰り支度をする。団員達は、来たときよりも荷物が増えていて荷造りがなかなか終わらなかった。列車に乗ることは慣れてきて、スムーズに移動できるようになった。



コペンハーゲン空港でチェックインしキャリーケースを預け、スターバックスで楽しかった思い出などを振り返り談笑しながら時間を待つ。

手荷物検査を終えると、そこに免税店が広がっていた。出国手続きをしていないのでは?と思っ

たが、入国手続きの簡単さからこんなものかと納得してしまった。

余裕を持った時間で集合時間を決め、それぞれ免税店で買い物を楽しむ。ここまで来て円をデンマーククローネに両替する団員もいた。

さて、飛行機に搭乗しようかと歩いて行くと長蛇の列が見えてきた。出国手続きの列だ。なんと、出国手続きは免税店の先にあり、しかも窓口が2つくらいしかない。周りにも飛行機の出発時間に間に合わず慌てる客が続出している。私たちの出発時間も刻一刻と近づき、吉井先生が係員に間に合うか確認してくれるも「夏のコペンハーゲン空港はいつもこんなもの。搭乗しなければ飛行機は飛ばないから大丈夫。」と軽い返答が帰ってくる。

いよいよやばくないかという時に、係員が小さな声で「成田行きの飛行機に乗る方はいないか。」とアナウンスを行ったので、慌てて申し出ると列の前に割り込ませた。出国手続きのキャパが全く追いついていない。走って搭乗口に行くと時間に遅れていることをスカンジナビア航空の職員に注意され、機内に乗り込んだ。どうやら私たちが最後の乗客だったようだ。



帰りは成田まで実時間で10時間50分の旅になる。今回は団員が皆固まった席だったので安心感があった。疲れていたせい、とても長い時間寝てしまい、行きの時と違いあまり暇を持て余さなかった。

9日目 8月17日(土) 無事帰宅

成田空港に到着し入国審査を終えた後、デンマーククローネを円に両替する。団費は現金で支払うようにしていたが、自分の支払いは全てカード払いだった。念のため両替していた自分のお小遣いはほとんど使われず、手数料を取られて目減りし円に戻った。

新千歳空港行きの飛行機まで時間があつたので自由行動とし、それぞれショッピングと昼食を楽しんだ。昼食ではおにぎりなどの日本食を楽しむ団員も多かった。

新千歳空港に到着すると、企画調整グループの担当者と新千歳空港で別れる団員の保護者が迎えてくれた。1人の団員とここで別れ、他の団員はバスに乗り込む。疲れを見せることも無く、デンマークでの出来事を楽しく話しながら登別市役所に戻った。

登別市役所では保護者や市職員に出迎えていただいた。団員達に病気や怪我、大きな事件も無く戻ってこれたことに安堵し、8泊9日の「短い」旅はあっという間に終わってしまった。

派遣研修を終えて

参加した団員の誰もが「もう一度デンマークへ行きたい。もっとデンマークのことを知りたい。ホストファミリーのみんなに会いたい。」と話していることに、この交流事業の意義と成果を強く感じました。デンマークでのホストファミリーや同年代の生徒、交流協会の皆さんとの交流が、団員達の心に色々なことをもたらしたことと思います。デンマークの皆さんが持つ「おもてなしの心」は、私たちに心地よい充実した時間を与えてくれました。

団員達は、海外の人達と交流する素晴らしさを肌で感じたことで、これからも海外の生活や文化に興味を持つことになったと思います。そして、海外の人達とコミュニケーションをとるためには、英語を話せることが必要なことも実感したことでしょう。

これから団員達が、国際的な広い視点を持ちながら沢山の経験を積み、大きく成長していくことが楽しみです。

そして、この「登別市デンマーク友好都市中学生派遣交流事業」が、中学生の豊かな人間性と広い視野を育む事業として、また、登別市とファボー・ミッドフュン市、リングの友好交流を深める事業として、これからも実施されることを期待しています。

また、この派遣交流事業の終了後に、ファボー・ミッドフュン登別友好協会 会長 リズィ・サンダー様、登別デンマーク協会会長 上田 俊朗様が、お二人同時に北海道社会貢献賞を、更にリズィ・サンダー様が登別市功労者表彰を受賞されたことは大変喜ばしく思い心よりお祝い申し上げます。

最後に、7月の派遣交流団の結団式から、事前研修・事後研修、そして本番の海外派遣、10月の帰国報告会と約3ヶ月間、多大なご尽力をしてくださった企画調整グループの皆様、一緒に団員を引率していただいた吉井先生、市民サポーターとしてご助力いただいた福岡さん、その他この派遣交流事業を支えてくれた全ての皆様に感謝申し上げます。

ありがとうございました。



人生を豊かにする教育

登別市立西陵中学校 吉井 真裕

教員になって20年。子どもたちにたくさんの情報を与え、覚えさせテストする。この日本の教育は子供たちを幸せにしているのだろうか？そんな疑問をいまだに感じることも少なくありません。

今回のデンマーク派遣交流事業に引率者として参加させていただき、特に感じたことはデンマークの豊かさ、とりわけ「教育の豊かさ」でした。「教育は誰のため？」「教育は何のため？」の問いに「子どもたちのためのもの」、「人生を豊かにするためのもの」と自然と答えられるそんな学びの場がデンマークの学校にはありました。

訪問団を受け入れてくれたリングフリー校は、幼稚園児から中学生が主に学ぶ比較的小さな学校でした。毎朝、全校生徒が音楽室に集い、皆で歌うことから1日が始まります。大きな声で歌いたい子、またそうでない子など様々でしたが、歌そのものを楽しみながら皆自分が心地よいと感じる声量で自然に歌っていました。子どもたちが朝から気持ちよく1日をスタートできるそんな雰囲気を感じました。また、訪問団の団員は現地の中学1年生（7年生）の実際の授業にも参加させていただきました。英語の授業では「お互いを知る・受け入れる」ということを目的として、自己紹介をお互い英語でする授業でした。英語が母国語ではないデンマークの子どもたちも、登別からの訪問団の中学生もたどたどしい英語ではあるけれど、ゆったりとした穏やか雰囲気の中、気分良く英語を使っていました。言葉を使うことの意味を英語教師である私自身、再認識することができました。数学の授業では、日常の生活に結びついた数学の課題を、皆で一緒に考え、数学が苦手だと思われる子どもが、得意な子どもに教えてもらいながら学んでいました。訪問団の日本の子どもたちも一生懸命デンマークの子供に教えようとしていたのが印象的でした。そこには、「数学の問題が出来るようになる」ことよりも「考える」ということが大切にされていることを感じました。

リングフリー校の生徒達と私たち訪問団が訪れた現地の公立校、ノーアエア校では、今デンマークの学校が力を入れているグループワークを体験することができました。グループワークが効果的に行われるような造りをした専用のグループワークルームが何室もあり、一つのテーマについて数人のグループで話し合い、考えをまとめ発表する授業です。その日のテーマは「日本の中学生の生活とデンマークの中学生の生活との相違点、類似点を発見しよう」というものでした。お互いたどたどしい英語でしたが、スマートフォンの辞書機能などを駆使しながら皆で四苦八苦しなながら対話を続けていました。「無理」とあきらめる者も、一方的に話し続ける者もそこにはいませんでした。それは一つの正しい答えを出すことが目的でも、高い点数をとることが目的でもなかったからではないかと私は思いました。「皆で一緒に考えること自体が楽しい」そんな、「学ぶこと自体が楽しい」という素敵な経験を子どもたちは日々の学校生活ですることが出来ているように感じました。

「そんなのんきな学習では世界の競争に勝つことができない」という思いも私自身の中で無いわけではないのですが、「本当にそうだろうか？」「じゃあ、この30年、日本は勝ってきたのだろうか？」と疑ってみることも必要だと思いました。その証拠に、デンマークでは中学から6年間英語を学ぶ中で、ある程度自由に英語を使えるようになっている事実があります。もしかしたら英語とデンマーク語の類似

性があるのかもしれませんが。しかし、デンマークの子もたちが中学1年生の段階では、今回訪問した日本の訪問団の生徒とあまり英語力が変わらないことから考えると、私たちの教育への発想を転換する時期なのかもしれません。

「学ぶこと自体が楽しいと思える授業」「子どもの人生を豊かにする教育」を行なっていかなければと痛感しました。

家庭教育でも見習うことがありました。私のホームステイ先には中学生の女の子と高校生の男の子がいましたが、彼らは夜9時になるともう寝る時間です。高校生の男の子は携帯電話を8時で没収されていました。中学生の女の子は自分の携帯電話すら持たせてもらっていません。毎日たっぷり9時間以上寝て学校に行く毎日でした。これは私のホストファミリーだけの話ではなく、今回訪問団がホームステイした家庭に共通のことだったようです。何が子どもにとって大切なのかの本質を大人が真剣に考えている結果なのではないでしょうか。

「子どものための教育とは何か」「人生を豊かにする教育」について考えさせてくれた今回の派遣事業は、私にとって大変貴重なすばらしい経験となりました。私を含め訪問団が日本とは異なるデンマークの人と文化をこのように体験することが出来たのは、これまで長い間、登別市とファボーミッドフュン市との友好交流が続いてきたからにほかなりません。両市の交流にご尽力されてきた方々に感謝の思いでいっぱいです。今回、このような貴重な体験をさせて下さった小笠原春一市長、武田博教育長をはじめ、事前・事後研修において多大なご尽力を下さった企画調整グループの方々、そして、私を含め団員を優しく包み込むように接して下さった土門団長に深く感謝申し上げます。今回の経験を活かし、日本の未来を担う子供たちの教育に微力ながら貢献していきたいという思いが一層強くなりました。ありがとうございました。